

臨床心理学実践演習授業報告

―昔話を授業に取り入れること―

千野 美和子

I、初めに

本稿は、昔話を題材として使用した授業の報告である。この授業は、臨床心理学実践演習という科目名で、2010年度から2015年度までの6年間の前期に、臨床心理専攻（2012年度から臨床心理学コース、2015年度から心理学科）の3年生以上の学生に開講された。この授業の構想段階では、科目名通りの内容として、臨床心理学の実践、すなわち心理臨床の現場に関わる内容を考えていた。しかし、初めて学ぶ心理臨床の内容に対してどこまで演習という授業形式を行うことができるかという懸念があった。そこで、内容を教える授業にせず、心理臨床的な考え方や捉え方を学ぶ授業を構成することにした。

その題材として昔話を使用した。心理学における昔話の研究はフロイトまで遡る。しかし、昔話を最も重要視し研究を行ったのはユングであった。ユング心理学の中核を成す元型論は、精神病患者との関わりとともに、昔話や神話の研究によって生まれた。普遍的な心である元型を探るためには昔話を研究するのが最もよいとされた。その後もユング心理学の後継者たちはユング派の視点による昔話の心理学的解釈を行った。

昔話には様々な心が表現されており、多様な視点で昔話を捉えることができる。これまでの心理学の授業で筆者が昔話を取り上げた実践例をあげる。「家族の人間関係」という授業の中で、いくつかの昔話を取り上げ、家族の視点から解釈し説明をした。特にグリムの『ヘンゼルとグレーテル』を取り上げ、家族の基本単位である、父親・母親・子ども（兄・妹）の関係について、講義を行った。また、「心理療法Ⅱ」では、「心理学と物語」という章で、日本昔話『手なし娘』の読み聴かせを行い、受講生に自分の解釈を書かせた後、いくつかの視点からこの昔話を解説した。今回の授業はこの流れの一つである。

シラバスに沿いながら、授業の形式と内容を報告し、

6年間の授業を振り返る。

II、授業のテーマと狙い

科目名の「実践」と「演習」をいかに授業の中に具体化するか検討した。「実践」については、テーマを「臨床心理学の知見を日常生活に活かす」とし、狙いには「2年間の臨床心理学の授業で学んだ知識や技法を使って、それを応用し、日常的な生活や生き方、現在または将来の家族、職場などの対人関係に活かすことを考える。1対1の関係や集団の中で、カウンセリング的な聴き方を通して、人とコミュニケーションする方法を学ぶ」をあげた。臨床心理学を学ぶ多くの学生は、将来の進路として臨床心理の専門的な職業でなく、一般的な職業に就くものが多い。現在学んでいる臨床心理学は、専門的な職業に就かなくても、日々の生活の中で活かすことができる。それを考える場としてこの授業を使いたいと考えた。

この授業は、知識を学ぶのではなく、自分で考え他者の意見を聞き新たに自分の意見を作り上げていく場とした。演習の形式として、グループの話し合いの前に、「自分で考える」時間と、全員でグループの意見を共有後、最後に「自分で考える時間」を設けた。グループで話し合い、他者と意見を共有することは必要なことだが、それ以上に大事なことは、自分自身の考えを持つことである。まず、自分で考え自分の中から湧き起る感情や思いを記録する。その上で、他者と話し合いをする。そうすることによって、自分の意見と他者の意見を区別することができる。話し合い後、他者の意見を取り入れながら、再度自分の意見を考え、それをミニレポートとして作成するようにした。

1回目のオリエンテーション時に、この授業のテーマと狙いの説明後、自分で考える際に、「意識すること」が重要であること、特に「女性の意識、女性の生き方、女性としての視点」という捉え方をしてみることを提

案した。自分の考えを持つためには、主体的な意識を持つことが必要である。その第一歩として今まで意識しなかったことを少しでも意識することを勧めた。ここでいう女性を意識するというのは、ステレオタイプな女性らしさをいうのではない。女性の視点で物事を見る癖をつけることや、女性は女性の良さとその価値に気づくことを意味する。さらに進めて、自分らしさを大切に、自分らしく生きていくことを考えることを目指す。

Ⅲ、昔話を題材にした理由

昔話には、人間の普遍的な心が表現されており、心や生き方を考える素材の宝庫である。昔話は色々な捉え方ができるが、筆者は次のように仮定して昔話を解釈している。昔話の主人公が男性なら男性の心の発達を、女性なら女性の心の発達を、そして主人公の年齢は、その発達時期の心の有り様を表現している。たとえば、思春期の女の子が主人公の場合、女性の思春期の心の有り様を表現していると考えて、昔話を解釈する。また、昔話は人類普遍の共通性を持ちつつも、それぞれの地域の独自性を持っている。話の構造は似ているがその展開や結末が異なるのである。そこに、社会や文化の特徴が反映される。つまり、日本の昔話には、日本人の心の有り様が表現されていると考える。

日本昔話には、結婚に関わる女性主人公の物語が多く存在する。それらの昔話を題材として、ちょうど同じ時期にいる現代の女性である受講生が、女性の生き方について考えを深めることができると考えた。結婚は青年期から成人期へ向かう女性にとって大切なテーマである。また、象徴的には結婚は成長の一つの頂点とみなすことができる。つまり、女性が結婚に至るまでの道のりは女性の成長のプロセスを表していると考えることができる。そのような成長プロセスを、現在の青年期女性である受講生たちはどのように感じるだろうか。

授業では、主に女性主人公が結婚に至る昔話を題材とした。そして、受講生が昔話を読んで素直に感じる気持ちを解釈の出発点として、ロールプレイング、模擬カウンセリング、ディスカッションなどいくつかの演習方法を使って、自分の解釈を深めるようにした。その際に、自分ならどうするのかという視点とともに、

この昔話から何を学ぶことができるかという点も考えるようにした。昔話から、普遍的な解決法を見出すこともできるし、リュティ (Lüthi, M. 1947) の述べる昔話の特徴ゆえにそこに様々な事象を読み取ることが可能である。それゆえ、考えることを目的とした授業の題材にはふさわしいと考えた。

昔話は小さい時に一度は見たり聞いたりしたことがある誰もが馴染みのあるものである。そのため、授業への導入もスムーズであろうと考えた。また、昔話は同時に小さい頃の懐かしい気持ちも一緒に思い出す。その時、子ども時代に戻りよい意味での退行が生まれる。昔話を題材にすることで、そのような退行が生じ、固定観念にとらわれない自由な発想が生じてくることを期待した (オリエンテーション時に昔話を思い出し親しむための演習導入)。

最後に、ここで狙いとした授業に適した本の制作 (大野木ら、2009) があった。元々この授業での使用を意図したものではなかったが、この授業の教科書として採用した。この本の昔話の題材や演習方法を使って、うまく授業を展開することができた。

Ⅳ、ロジャーズの方法論

臨床心理学を日常生活に活かすための方法論として、ロジャーズの心理療法の理論を使用した。ロジャーズはクライアントセンタードセラピー (来談者中心療法) を生み出した心理学者である。彼の理論は広く日本に行き渡り、カウンセリングという彼の心理療法を指すことが多い。彼の理論は現在のカウンセリングの基本とされ、その考え方は臨床心理学のみならず教育を始めさまざまな領域に取り入れられている。そのようなロジャーズの考え方は、日常場面でも活かす工夫ができると考えた。

本学科では2年生の前期「心理療法Ⅰ」の授業で代表的な心理療法の1つとして学ぶ。それゆえ3年生の受講生は基本的理解があることを前提としてこの授業を行うことができる。

この授業では、2年生で習った理論を復習し、それを展開した考えを身につける。まず、カウンセラーの3つの態度である「自己一致、または純粋性」「無条件の肯定的配慮 (積極的関心)」「感情移入的理解 (共感的理解)」について理解を深める。ロジャーズの最

も基本的な論文とされる「パーソナリティ変化の必要にして十分な条件」(Rogers,1957)から、6つの条件とその条件中のカウンセラーの3つの態度について解説した資料1を作成した(千野、2008)。それを題材にして、カウンセラーの基本態度について考えを深める。次に、その理論を日常生活に活かすためにどうすればよいのかを考える。論文「積極的な聴き方」(Rogers,C.R.&Farson,R.E.,1955)をまとめて資料2を作成した。この論文は、積極的な聴き方が心理療法場面だけでなく、職場でのよりよい人間関係を作る上でも役立つことを述べている。これを題材にして、日常生活に活かすことを考えた。この2つの資料を読み、ロジャーズの考え方を理解して、日常生活での応用を考える。

その上で、ロジャーズが実際にカウンセリングを行っているビデオを視聴し、理論がどのようにカウンセリング場面で実践されているかを学ぶ。このビデオは、『グロリアと3人のセラピスト』の1つである。グロリアという女性が当時アメリカを代表する3人の心理療法家の面接を受けるという設定で1964年に企画制作されたアメリカの映画である。あとの2人の心理療法家はゲシュタルト療法のパールズと論理療法のエリスである。かなり古いビデオであるが、著名な心理療法家の実際の心理療法の場面が残されておりとても貴重なビデオである(末武、2013)。

昔話を題材とした演習の中では、ロジャーズの方法論を元にして、模擬カウンセリングを体験するように計画した。また、他者が話している時には、傾聴することを常に意識させた。

V、授業の構成

全体の構成は大きく分けて、2部構成である。15回の授業時間を以下のように構成した。1回目のオリエンテーション後、1部として2回目から5回目までをカウンセリングの方法論を学ぶ時間とし、2部として6回目から13回目までを昔話を使用した演習の時間、14、15回目をまとめとしての発表の時間とした。

その前に、1時間の授業の流れについて述べておく。15分を1つの単位として、6単位に分ける。始めの15分は、出席を取り、授業に関わるアナウンス後、前回のミニレポートを中心に筆者が前回の内容につい

てまとめコメントをする(後年の授業ではミニレポートの返却やミニレポートからまとめたプリントを配布)。そして、最後の15分は、題は回により異なるが、ミニレポート作成の時間とする。A5版の白紙の紙を渡し、日付、学生番号、氏名の記入、内容は自由記述とし、時間の終わりに提出する。この始めと終わりの単位はどの回でも同じである。中の4つの単位(1時間分)は回ごとの内容に合わせて構成した。2部の教科書使用の演習は、1人で演習・グループで演習(ロールプレイング、模擬カウンセリング、ディスカッション)・全員で共有の構成は同じである。

以下にそれぞれの回の説明と具体的な演習内容を挙げる。ここに載せるのは、計画段階のものであり、年度によっては時間が足りずできなかった演習もある。

1回目：オリエンテーション

シラバス配布後、II～IVで述べた授業テーマと狙いについて説明する。昔話の説明の前に、受講生全員に、「昔話だと思うものを、ホワイトボードに記入」させる。それをもとに、昔話の定義、神話・伝説との違い、童話と呼ばれるグリム童話とアンデルセン童話の違いなどから、昔話について解説し、この授業でなぜ昔話を取り上げるのか説明する。

2回目：カウンセリング的な聴き方を学ぶ その1 「日常会話との違い」

3人グループを作り、1人はオブザーバーとなり2人の会話を観察しその会話の特徴について考える。まず、始めにする会話は普通のおしゃべり「何でもよいから2人でしゃべってみよう」である。役割を交代して3回行なった後話し合い。その次に、話し手と聞き手に分かれて会話する「話し手は何でも話したいことをしゃべってみる。聞き手は話し手が話しやすいように聞き役に回る」。役割交代後話し合い。そして、普通の会話の特徴について、グループで考えた意見をグループの中の一人が発表。発表者はそのキーワードをホワイトボードに板書。ホワイトボードに出された意見の中から、普通の会話とカウンセリングの会話の共通点・異なる点から、カウンセリングの特徴・普通の会話の特徴、その違いについて考える。

3回目：カウンセリング的な聴き方を学ぶ その2 「言葉を意識する・応答練習」

ホワイトボードに板書する言葉に対して、どう答えるかを理由も含めて自分のノートに書く。例題として「た

たとえば話し手が『頭が痛いのです』と言った場合どう答えるか。普通の会話ならどう答えるか、カウンセラーならどう答えるか考えてみよう。問1「話し手が『学校に行っていないのです』と言った場合どう答えるか」、問2「話し手が『何だか外が怖くて一歩も出られないのです』と話した場合どう答えるか（註1）」同様に尋ね、ノートに記入。その後、3つの応答について、全員が自分の応答をホワイトボードに板書、書かれた応答について理由を尋ねながら検討する。それを通して、普通の会話とカウンセリング的聴き方の違いを学ぶ。最後に自分がクライアントならどんな答えを言ってほしいか「言ってもらいたい言葉」をノートに書いて、全員がホワイトボードに板書、検討する。

4回目：カウンセリング的な聴き方を学ぶ その3
「ロジャーズを手本にして・文献」

資料1から「ロジャーズの挙げた3条件」についてどのようなものか考える。資料を読んで3条件について、理解できた点、疑問点などをノートに書く。次に資料2から「積極的聴き方」について、いかに実践できるか考える。資料を読んで、積極的聴き方とはどのようなものか考えて、理解できた点、疑問点などをノートに書く。その後、3～4人でグループを作り、疑問や自分の考えを出し合い、話し合いをしてまとめる。グループの1人が、話し合いのキーワードをホワイトボードに発表し、全員で共有。

5回目：カウンセリング的な聴き方を学ぶ その4
「ロジャーズを手本にして・ビデオ」

ロジャーズのカウンセリングのビデオ『グロリアと3人のセラピスト』を視聴し、理論について考える。前回の論文で述べていることをカウンセリング場面でロジャーズがどう実践しているのかを見る。メモを取りながらビデオ視聴後グループで話し合い、話し合いの内容を発表。

6回目：小グループに分かれてテキストを題材にして昔話から生き方を考える その1

この回から教科書を使用し昔話を題材とした演習になる。この回は演習方法を学ぶ時間とし、よく知られた昔話『瘤取り』を題材とした。始めに1人で演習を行う。教科書の話を読んで自分の感想を記録し、解説やコラムを読み理解を深める。さらに理解を深めるために、3～4人のグループで実習をする。まず登場人物を演じるロールプレイングを行う。自分が感情移入で

きる登場人物になって、自由にその人物の気持ちを表現する。次に模擬カウンセリングを行う。グループの中の1人がカウンセラー、1人がクライアントとなり、登場人物の誰かが相談に来るという設定でカウンセリングを行う。他の人はオブザーバーとしてその過程を見守る。どちらも5～7分を目安とする。その後、グループの中で各自の感想や意見を出して話し合いをする。そして、グループの1人が話し合いの内容を口頭で（後にホワイトボードで）発表し、全員で共有。

7回目から13回目：小グループに分かれてテキストを題材にして昔話から生き方を考える その2からその8

教科書に載っている女性主人公の昔話を使用して演習を行った。演習の方法と流れはすべて6回目と同じである。使用した昔話は、順に『鉢かづき姫（いじめについて考える）』『かぐや姫（女性の自立）』『千原のおじぞうさん（配偶者選択）』『なま豆炒り豆（家族になるとは？）』『手なし娘（宗教性）』『猿の婿どの（異性と出会うこと）』『鬼が笑う（母子関係の修復）』である。（1）内は、著者の挙げたテーマである。受講生は、テーマを参考にしながらも、自由に自分なりの昔話解釈を考えた。

14回目・15回目：各自が選んだ昔話を自分で解釈して発表し生き方を考える

各自が昔話を1つ選んで解釈して発表する。昔話のあらすじと自分の解釈（自分はどのように理解するか）を書いたA4版1～2枚分のレジュメを作成し、5～8分で発表する。

VI、年度による変更点と問題点

6年間の授業の経過の中で、それぞれの受講生の特徴を配慮しながら、適時演習方法を調整しながら授業を行った。

最も思案したのが、ミニレポートの取り扱いである。6年間を通じて行ってきたことは、毎回提出されたミニレポートを読み、そこに書かれた意見をまとめ、次の授業の始めにコメントとして全員に伝えることであった。ミニレポートに書かれた質問については、できるだけ丁寧なようにした。ロジャーズの方法論に関わる質問や、模擬カウンセリングで挙げている疑問点は、的を射たものであり、受講生がかなり深い

ところまで考えていることが理解された。また、昔話の解釈についてはみんなにも聴いてほしいと思う解釈は、読み上げて共有した。どの解釈もその人独自の視点があり興味深く、できるものなら全員の書いた解釈を全員で共有する方法はないものかと考えていた。まず、その一歩として、今まで提出したままで終わっていたミニレポートを返却するようにした(2013～)。その目的は、受講生それぞれが自分で考えた解釈を記録として残しておいてほしいと考えたからである。そして、そのミニレポートに、コメントを付けて返却するようにした。コメントの方法は、大事というところに赤線を引いたり2重丸をつけたりする簡単なものであるが、筆者なりのフィードバックを受講生に返すためである。特に重視したのは、ミニレポートに書かれた質問や疑問点には筆者なりの答えを書くようにした。また、受講生の捉え方の自由を尊重しながらも、少し解釈のアプローチのようなものもコメントに含めた(2015)。最後の年になったが、懸案だったみんなの解釈をみんなで共有する試みを行った(2015)。全員の書いたミニレポートをA4版のプリント1枚に短くまとめて次回に受講生に配布し、全員の意見を共有した。20人以上の受講生のミニレポートをA4版1枚にまとめるのは至難の業であり、書いた本人の意図がうまく反映されない内容になった心配もあるが、最後の年に小さい形ではあるが実現できたことは前進であった。

次に演習方法の問題点である。グループでの演習をどのようにするのが、毎年の検討課題であった。一番の問題はグループ作りである。グループ作りは実際の演習活動を左右する要因となる。つまり、グループ作りが個人の演習参加へのモチベーションに大きく影響すると思われる。特に第2部での演習グループをどのようにするのが苦心した。グループの人数は、集団として意味をもつ最小の単位の3人を基本とし、全体の人数の都合で4人のグループも可とした。グループの作り方を試行錯誤しながら行った。毎回その都度出席者の様子を見ながらグループ作りを行った。多くは席の近い者でグループを作ったが、人数的にはみ出す場合は、席の遠くの人と組んでもらった。当初グループとしての成長を期待しグループメンバーの固定を考えていた。それを導入した年度(2012)もあった。出席番号でグループを決めてこちらでグループを指定し

た。しかし、欠席する受講生がいるために結果的に変則的なグループになってしまうことや、グループを決めることに対する意見が受講生から出たこともあり、次年度からは従来通りのやり方とした。受講生全員がある程度顔見知りである場合、グループメンバーの変更は柔軟に対応できたが、そうでない場合や、見知らぬメンバー内で話すことに慣れていない受講生もいて、そのあたりを配慮しながらのグループ作りであった。受講生の、仲間とグループを組みたいという要望と色々なメンバーと組みたいという反対の要望があったが、結果的に前者を優先するグループ作りとなった。席の近い者がグループになるので、仲の良い者がグループとなり、ある程度同じグループでの活動ができる一方、このやり方でも欠席者が出るグループは新たにグループを組むことになり、メンバーの変更がおきた。しかし、席の近い者同士でグループを組むという関係性を配慮したやり方は有効であったと思われる。

グループで行う実習はロールプレイングと模擬カウンセリング(註2)である。この実習の基本的な説明は教科書を元に行い、あとは教科書の例を参考にしながら、各グループの自由な発想にまかせた。この実習は昔話の理解を深めることが第一の目的であるが、昔話を題材として生き生きとしたコミュニケーションができるようになることも目指した。どちらの実習も自分ではない人物(役)を演じるという実習であり、特に昔話の登場人物になってやりとりをするというのは、初めての経験であったと思う。そして、どちらの演習も、真剣さと遊ぶことの自由さが必要である(註3)。真剣さと自由さのバランスがうまく取れた場合、実習がうまく展開する。仲間でのグループは緊張せず自由に活発な実習が行われた。しかし、グループによってはグループの仲間内の話題となり、課題への取り組みがおざなりになる場合も見られた。そのあたりのことも注意しつつ、活発な実習ができることを重視した。

最後にグループ内の意見を全員で共有する方法である。初めの頃は、各グループの発表者が順次口頭で発表し、それについて筆者が質問をするなどのコメントを返していた。後に(2013～)、全員がより集中して内容を傾聴できるように、グループの発表者が一斉にホワイトボードに意見(キーワード)を板書し、それについて、筆者が読み上げてまとめる方式に変更した。受講生各自が自分の意見を尊重できるように、この段

階での筆者のコメントはできるだけ控え、次の回でコメントした。

最後の各自の発表については、大きな問題はなく、最初のやり方で最終年まで行うことができた。

Ⅶ、成果—ミニレポートから

「自分で考えること」を重点に置いたこの授業は、ミニレポートに受講生の成果が詰まっている。このミニレポートには、受講生の考えだけでなく、グループでの実習から得たものすべてが含まれる。ここでは、受講生の書いたミニレポートから、この授業で狙いとしたことや昔話を題材としたことについて考察する。個々の昔話の内容に関わる解釈はここでは直接触れない。

昔話を題材として使用することについては、期待感と不安感の表明があった。また、ある受講生からは昔話を取り上げる必要性の疑問が出されたこともある。しかし、一方演習をする中で、筆者が伝えてきた昔話の意義や重要性を感じ取り言葉にした受講生や心理的解釈の面白さを述べた受講生もいた。

ディスカッションや意見の共有を通して、他者の考えを聴くことの大切さを感じ取っている。色々な考えがあってよいのだという理解や、様々な考えを知ることができ視野が広がった効果をあげている。

2つの実習については、毎回難しいというコメントがあり、受講生によっては困難なものであったようだ。その一方で、実際演じてみることによって様々な気づきがあったことも確かである。多くは、その登場人物を演じることで、その人物の気持ち理解できたというものである。物語を読んで感じるのは、その人物の外側からその人物を見る客観的な見方である。それに対し、その人物になるというのはその人物の内側からその人物を理解することである。その人物を共感的に理解することになる。その意味で、臨床心理学の訓練にロールプレイという方法が使用されることは頷ける。この実習が昔話をより深く理解するための目的にかなっていた結果である。そして、もう一つ興味深い結果が報告されている。それは、グループで登場人物を演じることによってメンバーも驚くような思いがけない物語の展開が生じていくことである。役割を演じる台本はなく、それぞれの登場人物になって自分で考

えた台詞を言う。そこに個人の意図が入りつつも、グループの場の作用によって個人を超えた思いがけない展開がおこる。また、場の作用によって、意図的でない自然な流れの昔話のその後の展開が作られることもある。どちらも、生き生きしたコミュニケーションができた結果と思われる。真剣さと自由さがうまくバランスが取れた時、初めて可能となる。そして、グループの持つ力がうまく働いた時、このような成果を得ることができる。

昔話の解釈は受講生の個々の感じ方や考え方が反映される。つまりその人の個性が浮き彫りにされる。毎回、昔話の物語は違っても、書かれた解釈にはその人の思想、その人らしさが表れる。受講生の中には、昔話のロジックに馴染めない者もいた。合理的科学的思考が強く、なぜという疑問点ばかり出てきたようだ。その不合理さを超えていくことの難しさがうかがわれた。多くの学生は、昔話を読んだ素直な感想から解釈を出発した。物語の中で虐げられた者へのかわいそうだという共感が強く表現された。その一方で、それに対する反対意見もあり、意見の奥にある価値観の違いを考えるきっかけとなった。もう一つの特徴として、物語の登場人物の中で悪とされる人物への共感的目線である。なぜそのようなことをしなければならなかったのかについての受講生それぞれの解釈がそこに表現されている。また、昔話のロジックを象徴的に捉え、物語の筋を根拠としながら、女性主人公の成長の物語としてまとめ上げた解釈もあった。書かれた解釈には、共通した視点とともに、個人のオリジナルな視点があった。

題材とした昔話は、女性主人公が結婚をめぐるように生きてくかをテーマにした物語である。それぞれの昔話の女性主人公の生き方から自分の生き方を考えることが大きな狙いであった。昔話から様々な生き方を学ぶことができるが、その生き方を批判して自分ならどうするのかどう生きるべきかを考える材料ともなった。また、昔話の内容から、女性というものを象徴的に考える機会もあった。

Ⅷ、おわりに

6年という年月の間、昔話を題材として授業を継続して行うことができたことそのことが筆者にとって奇

跡のようなものである。直接即座に役立つ正しい知識を教える授業ではなかったが、受講生の多くは楽しんで授業に参加してくれたと思う。受講生たちと昔話を通して意見を交わしたり、彼女たちの解釈に触れることができたのは筆者の楽しみや喜びであり、新たなインスピレーションを得る場であった。本当に貴重な経験をさせていただくと思う。受講生の方々にとって、この授業で経験したことがどこかで役立ってくれればと願う。最後にこのような授業を行い継続できる環境を与えてくださったみなさまに感謝して筆をおく。

註

註1：河合（1992,p165）の挙げている例を使用させていただいた。

註2：ロールプレイングは心理療法の一つとして使用される方法であり、模擬カウンセリングはカウンセリングの訓練として行われる方法である（大野木ら、2009）

註3：ここでいう遊ぶことというのは、いい加減・適当という意味ではなく、遊びの要素や感覚が必要だという意味で述べている。

引用文献

- 河合隼雄（1992）心理療法序説 岩波書店
- Lüthi,M.（1947）Das Europäische VolksMärchen A.Francke Verlag Bern 小澤俊夫訳（1969）ヨーロッパの昔話 岩崎美術社
- 大野木裕明・千野美和子・赤澤淳子・後藤智子・廣澤愛子（2009）昔話ケース・カンファレンス ナカニシヤ書店
- Rogers,C.R.（1957）The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*,21,95-103 伊東博（編訳）（1966）パースナリティ変化の必要にして十分な条件：サイコセラピーの過程（ロージャズ全集4）岩崎学術出版社 pp.117-139
- Rogers,C.R.&Farson,R.E.（1955）Active Listening. 友田不二男（編訳）（1967）積極的な聴き方（ロージャズ全集11）岩崎学術出版社 pp.307-332.
- 千野美和子（2008）カウンセリングの基本的な知識と

考え方：宮川充司・津村俊充・中西由里・大野木裕明（編）スクールカウンセリングと発達支援 ナカニシヤ出版 pp.13-22

末武康弘（2013）監修者による解説と資料：Burry,P. J.（2008）Living with 'The Gloria Films' PCCS Books Ltd. 末武康弘（監修）（2013）「グロリアと三人のセラピスト」とともに生きて コスモス・ライブラリー pp.239-270

